



持っているガーダは、その古いしきたりに抵抗して、自分なりの生き方を貫こうとする。

僕はピースボートのヨルダン担当として、ここ数年、首都アンマンに近いパレスチナ難民キャンプで交流プログラムの作成に携わっている。難民キャンプでは、長老を筆頭にした堅固なヒエラルキーが築かれていて、映画の中と同様に昔ながらの慣習や価値観が何より大事にされている。それは一方で、若い女性は個人の人格など尊重されず、そのヒエラルキーの最底辺として生きるということを意味している。

◇

難民キャンプの人たちと共催したイベントで、僕たちは子どもたちに喜んでもらおうと色々な出し物を用意した。ところがそれで子どもが大騒ぎすると、それを沈めようと大人たちが子どもをかなりの力で殴りついたりムチでひっぱたいて追い払ったりする。

また、ホームステイさせてもらったのだが、僕らのグループにはパレスチナの専門家の方にも同行してもらっていた。先方では、その人は偉い先生だということになってしまい、長老の家で一晩中寝かせてもらえないほどの歓待を受けた。しかも 100 人近くの親類縁者が集まってきて、一人一人紹介された。その中で女性たちは〇〇の妻というような紹介しかされず、お茶汲みをさせられて終始沈黙していたという。歓迎はありがたいことだが、他の家庭と異なるそのあまりの歓待ぶりと、女性に対する扱いに対してその専門家の方は辟易してしまったようだ。そういうことはかつて交流したガザでも顕著だった。

◇

難民キャンプでは、昔ながらの大家族でと

もに支えあう暖かさだとか、かつての日本にあったような純朴さという点でいまの日本社会にない良さがある。けれど、古い慣習で若者を束縛し、暴力的に言うことをきかせようとするのが当たり前という状況が残念ながらある。そのような社会で、ガーダのように自分の可能性に挑戦したり、自由に生きたいと願う若者、とくに女性にとっては、それを実現して生きることがどれほど難しい事なのかということを考えさせられる。もちろん、それぞれの社会にはそれなりの良さも悪さもあるのだから、そのこと自体を僕らがいいとか悪いとか言うべきではないだろう。

僕がとりあげたいのは、その昔ながらの慣習やヒエラルキーは、パレスチナ人が自らの手で選び取った結果そうなったわけではないと思うからだ。それはイスラエルの建国と、その後の長く続く軍事占領や難民生活によって、彼らが住む土地を奪われたそのとき以来、ずっと維持され、より強固になり続けてきたモノなのではないだろうか。

狭いキャンプでともに支えあうことで生きられないために、50 人の大家族が当たり前などという状況がつくられたり、難民として故郷に帰れないまま、パレスチナの伝統文化が郷愁とともに、かつての生活以上に強固になっていくというのは容易に想像できる。

そしてその暴力性は、今もパレスチナが強大な暴力の犠牲になっていることを映し出している。自分たちが暴力にさらされ続けているのに、世界では誰もが見て見ぬふりをしているという状況で、「暴力的になるな」という方がどうかしているのではないだろうか。そうした状況でも、パレスチナにはいく

つかの非暴力運動がある。しかし現状の暴力構造が変わらないままでは、そういう人たちの努力がなかなか説得力を持ちにくくなってしまふ。



今月、イスラエルがガザの海岸を爆撃したことでハマスが武装闘争を再開した。ハマスが抵抗を激化させれば、メディアはいつものように、良くて「どっちもどっち」的な「憎悪の連鎖」論が、悪くすると「自爆テロをやめろ」というハマスを説教するような論調が支配的になるだろう。しかしパレスチナ人が自らの手で決めた政権を認めず、政治的・経済的にしめつけているのは誰なのだろうか？

ハマスとファタハの対立でも明らかなよ

うに、長期の占領状態に置かれたパレスチナ側に、いくつもの軋轢や問題があるのは間違いない。それでも、この問題の本質はイスラエルの政策や軍事占領であり、その状況を放置し続けている国際社会にある。

現在のパレスチナ社会で声を挙げられるような、ガーダのような女性はたくましいと思う。けれど、パレスチナ人自身の手で、自分たちのあり方を本当に決めることができる日が来れば、無数のガーダが、パレスチナの女性たちが声を上げることができるのではないだろうか。パレスチナの未来をつぶしてはいけない。それは僕らを含めた国際社会が、その状況を築くことができるかにかかっている。

## NP ニュース「Rumors of Peace」2006 年第 1 号

翻訳：小林 善樹 NP J 理事

NP ニュース「Rumors of Peace ルーマーズ・オブ・ピース」(平和のうわさ) 2006 年第 1 号が届いていますので、その内容の要点などを紹介します。英語の原文は、1 月 15 日に大畑さんから流された FW: Upcoming Palestinian Election and more の中に書かれている通り、<http://nvpf.org/np/english/pressroom/Vol6Issue12006.pdf> で見ることができます。(写真は印刷物よりも鮮明でした)。このニュースは NP から年 3 回発行されているものです。A4 判 6 頁建てで、テーマを列記しますと、以下の通りです。

※編集部注：この原稿はもっと早く掲載予定でしたが、紙面の都合で延期されていました。

\*\*\*\*\*

●巻頭言、事務局長メル・ダンカン「勇気ある活動を」(昨年 11 月からイラクで行方不明になっている CPT メンバーの無事と解放を祈念するとともに、NP を発展させよう、と

の呼びかけ)

●「ミンダナオが第二次平和維持プロジェクトとして選定された」(訳文下記)

●「スリランカ・プロジェクトの最新情報」

(主に大統領選挙監視関係)

●「世界中の NP からの最新情報」(国際、アフリカ、アジア、ヨーロッパ、ラテン・アメリカ、北アメリカ)(要約下記)

●「現場からの報告:スリランカ」(FTM のプラミラ・シンハの活動報告と選挙監視ボランティアのティム・ウォリスの報告(これは大橋さんから流された報告と類似))

●「アドヴォケイト・チーム・メンバーのスリランカ訪問報告」(ダイアン・ダン)

「アドヴォケイト・チーム・メンバー」というのは、米国内で NP の予算の相当な部分を寄付している主要なボランティアのメンバーとのこと。

●「ピースキーパー資格者のプールの強化」NP 能力構築委員会(要約下記)

●「2006 年に NP を支援するための 6 項目」(ラジヴ・ヴォラ)(要約下記)

### ●「ミンダナオが第二次平和維持プロジェクトとして選定された」

非暴力平和隊(NP)は間もなく、数十年にわたって何度もの武力紛争を体験して来たフィリピンのミンダナオに派遣するために、5 人の国際チームの採用を開始します。ムスリム住民の自決権を求めて闘っている最大のゲリラ組織二つとの間の停戦・和平合意は、恒久的平和を築き上げる機会をもたらすものです。しかし、その合意が崩壊して暴力が再現する危険がまだある。NP のチームは、地元の平和維持活動家たちが、非暴力紛争介入のトレーニングや同行および草の根の早期警報システムの能力向上を通して彼らが活動できるように、彼らの能力向上を目標にします。

NP は、25 万ドル(約 2 千 9 百万円)の資金

調達が確認され次第、ミンダナオ平和維持プロジェクトの実施を要員の採用から始めます。可能性のある新メンバーは、さらなるオリエンテーションのためにミンダナオに派遣されるのに先立って、非暴力介入についての評価とコア・トレーニングを受けることとなります。このチームは、「バンタイ停戦」や「パカット」を含むいくつかの地元の NGO と共に活動するばかりでなく、さらにスル地域の西ミンダナオでの調査活動およびフィリピン政府側と共産ゲリラの間の紛争の状況についての調査活動をおこないます。

●IGC メンバーのラム・マニヴァナンとスタッフ・ディレクターのデビッド・ハートソウが担当する新設の NP 能力構築委員会は、NP および英国ピースワーカーズと合同で 500 人の「ピースキーパー資格者」を募集するという目標を設定した。その登録者は、男女を問わず 21 才以上で、最低限 1 年半のフルタイムの現地派遣メンバーとして、あるいは即応派遣のための予備員(3 年間の期間内に 1 ~2 か月前の予告により 6 カ月以内の活動に従事できる人)として従事しようとする人でなければならない。この目標を達成するために NP は、3 週間のコア・トレーニングをおこなう。NP は 2006 年末までに 150 人の資格者を得たいと希望している。登録に参加する方は [www.peaceworkers.org.uk/register](http://www.peaceworkers.org.uk/register) をご覧ください。特に非暴力紛争変換や介入のトレーニングや経験をお持ちの方は応募されることをお奨めします。

●「2006 年に NP を支援するための 6 項目」  
(アジア地域コーディネータ,ラジヴ・ヴォ

ラ氏)

1. 定期的な資金カンパを! (NPの資金の半分以上は個人から寄付によるものです。

2. NPの支部に参加したり, 新たに支部を始める。

3. 年に8~10回発行されている「e-ニュース」を受信するためにe-メールアドレスを登録することによって情報を受け取る。(記者注: 申込先は [info@nonviolentpeaceforce.org](mailto:info@nonviolentpeaceforce.org) でいいようです。記者も今回申し込んだ)

4. NPについて人々に語りかけ, ニュースを配り, ビデオやDVDを見せ, ウェブサイトへのリンクを知らせ, 催しに招くこと。

5. 支部が近くになくてもあなたの才能を発揮することはできます。NPはそのための支援(通訳, グラフィック・デザイナー, インターネットのエキスパートなど)を提供できます。

6. 非暴力について, 非暴力的紛争介入について, 学ぶこと。

### ● 「世界中のNPからの最新情報」

1. 国際: NPは, スリランカで少年が兵士に徴募されることの防止を目指してユニセフとパートナーを組み, 包括的アプローチに取り組み, 今年1月1日からジョイント・プロジェクトを始める。

2. アフリカ: (1)暫定的アフリカ地域コーディネータにレデンプトル・レイズ・ビンタが任命された(共同代表からの手紙で既報), (2)NPは, 北ウガンダの4万人の「夜の通学生」の問題(共同代表からの手紙で既報)に共鳴する「国際グルウォーク・ディ」への支援を激励した

3. アジア:インドでは9月11日に, マハトマ・ガンディーによるサチャグラハの開始を

記念して250人の男女(多くのムスリムを含む)が参加した集会が開かれた。

4. ヨーロッパ:ブリュッセルの国際関係学部でNPの活動について報告し, 「EUの民間危機対応能力の強化」と題したNGOの紛争処理イニシャチヴの展示をおこなった。また, 3月22~27日には, ヨーロッパ地域のメンバー団体の年次集会がスペインのバルセロナで開かれる。他の情報についてはウェブサイト [www.npeurope.org](http://www.npeurope.org) を見られたし。

5. ラテン・アメリカ:コロンビア・ワーキング・グループを代表して地域コーディネータのアルヴァロ・ラミレス・ドゥルニは, 9月にコロンビアのラ・ユニオン地域を訪れて, 暴力の現状を調べ, いろいろな「ピース・コミュニティ」と対話した。1997年以来「ピース・コミュニティ」のメンバーは何百人も殺されている。コロンビア軍がプレゼンスしているにも関わらず, その殺人の多くは準軍事組織によってなされている。

6. 北アメリカ: (1)「トレーナーのトレーニング週末セミナー」がいくつか計画されている。トレーニングを受けたヴォランティアはその次に, 地域で非暴力的紛争介入の基礎についての一日教室を受け持つ。

(2) アドヴォケイト・チーム・メンバーのリンダ・ダンとFOR支部は, IGCメンバーでありユース・コーディネータのヒンドロ・ポカワとともに10月にカリフォルニアで4日間のスピーキング・ツアーをおこない, 二つの高校と二つの大学でヒンドロのシェラレオーネでの流血の暴力の経験を話した。高校では生徒のための合同非暴力トレーニングを後援する。

.....

# 大島みどりさん仙台報告会の経緯

鳥山 敦 N P J 会員

## はじめに

私が仙台に引っ越したのは2005年の11月である。それより前には、私は東京から約60km離れたところに住んでいた。

私はその頃から、自分の住んでいる街での活動というのを考えていた。東京から約60km離れているといっても、まだ東京に通える距離である。東京というのは一極集中の象徴のような街で、そこには様々な情報が行き交い催しが行われる。そのような情報に接し、また私の場合は催しの主催者側に立ち、自分が日本の最先端にいるような気になってしまう。しかし、それは時間、空間が限定された中における、一過性のものではないかという疑念があった。

私は、近年では多くの参加者が集まったらしいイラク反戦運動における、催し的主催者側にいた。東京から約60km離れたところから主催者側として関わることからして妙なのだが、そんな催しにおいても、人々は東京近郊から集まって、そして催しが終わると帰って行ってしまふ。帰って行った人は、自分の住む街で何をしているのだろうかという疑問が私にはあった。これは、自分が自分の住む街で何ができるのかという疑問に直結する。

引っ越した後もそんなことを考えていたら、非暴力平和隊日本の事務局から大島みどりさんの報告会の開催が呼びかけられた。

## 準備

とりあえず開催に向けて動いてみることに

したが、まず、私には仙台における知り合いがいない。そこで第一歩は仙台での報告会に協力してくれそうな方々を紹介してもらうことになる。皆さんの尽力の甲斐あって、3名の協力者を得ることができた。後に一人増えて4名となり、これが仙台報告会的主催者グループとなった。

非暴力平和隊日本は理事が全国にいたことが特徴であるので、全国各地で催しを行える下地はあると思うので、今後は全国各地での積極的な取り組みを期待するものである。このグループにおいてミーティングを行い、日時、会場などを決めた。私には全く土地勘がなかったので、会場を決めるときなど協力者の方々の助言が大きかった。

私には一つの仮説があった。それは、「催しにおいてできる限りの宣伝を行えば、それなりの参加者が得られる」というものである。仙台報告会の宣伝は以下の様であった。

1. 知り合いへの直接の宣伝
2. グループへのダイレクトメール
3. チラシを置くことのできる場所へ置きに行く
4. インターネットを使つての情報収集
5. マスコミへの働きかけ

1. については、私個人に限って言えば知り合いがいないので全くできなかった。2、3. については市民活動サポートセンターにある情報を用いた。実は、各地にある市民活動サポートセンターには使えるものが多く揃つてい

る。ただし、3. について実際に行ってみると、不特定多数の人が自由に出入りするような場所ではなく普通の事務所だったところがあったらしいが、4. については東北地方で「スリランカ」「平和構築」などをテーマにしている研究者、大学のボランティアセンター、国際協力関連のサークルを調べ、ダイレクトメールを送った。5. については結果として、読売新聞と河北新報（地方紙）に情報が掲載された。読売新聞については、広告代理店が押さえていてもし広告が入らなかったら NGO 等からの情報を載せることができるスペースがあったので、それを使った。

## 当日

さて、そんなこんなで当日を迎えた。当日の私は、NPJ 事務局から送られてきた CD-ROM を街の中心にある郵便局に自転車で取りに行くことから始まった。快晴の空と桜を見ながらこれは花見が競合相手になると思った。

会場ではいくつか工夫を凝らした。発表中に映写される写真を印刷した紙を壁に貼り、後で見ることができるようにした。また、スリランカについての情報も貼りだした。また、書籍立ち読みコーナーを作り非暴力に関する書籍を持ち寄った。また、スリランカ産の紅茶をいれて参加者に配った。また、休憩時間に音楽を流して参加しやすい雰囲気を作った

りもした。

参加人数は約 20 人であり、会場の広さと比べてさびしいということにはなかった。

## 振り返って

まず、参加者数について考えてみる。仙台報告会での宣伝にかけた労力と、福島での報告会の様子を考えると、やはり知り合いへの宣伝の効果は大きいことがわかる。

また今回は質問の時間を十分とることができなかった。催しにおける時間配分は難しいところである。

さて、当然のことであるが今回は東京から講師を招いた。しかし、地元での持続的な活動を考えると、この東京依存は考え直す必要がある。地元でどうアンテナを築いていくかは今後の課題である。

主催者グループが、報告会が終わって解散というのはもったいないという意見もあるかもしれないが、無理に引っ張っても目的を見失うだけになると思ひ今後のことは特に決めなかった。何か機会があればまた行動を起こしたいと思う。

以上のように、地元には意外とツールが揃っているものである。これを読んだ方々も地元での活動の際には参考にしてもらいたい。また、今回ご協力を頂いた方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げたい。

.....

# フィールドワーカー大島みどりさんの帰国報告会に参加して

駒崎 ゆき子 NPJ 会員・福島非暴力平和隊ネット

仙台の鳥山さんのメールに「大島みどりさんの報告会を仙台でやりたいが協力できる方はいませんか」とのメールを見たとき、「非暴力で平和を守る」とはどうすることなのか前々から興味がありましたので、実践してきた大島みどりさんにも興味を持ちました。仙台で開催できれば、ぜひ聞きにいきたいと思ったのです。

### ★ 東京の報告会

そのうち一番早く東京で大島みどりさんの報告会を開催するとメールを見つけ、日程的にも行けるので報告会を聞いてみることにしました。わたしは大島みどりさんを新聞の写真などからたくましく強い女性と思っていたのですが、本人は華奢でやさしい人なので驚きました。お話は意外と難しく感じられ、あまり頭に入りませんでした。

しかし質問が多く出て、それも難しい質問と私には感じられましたが、大島みどりさんは真剣に答えておりました。その姿を見て、やはり心の強い人だなあと感じました。名刺を交換させていただき、「仙台に来るのであれば、郡山にもお寄りいただけませんか」と話し、郡山の報告会も開催したいと思ったのです。

### ★ 報告会の準備

福島非暴力平和隊ネットは、出来たばかりです。しかし、県内各地の会員7名が数回集まって相談し分担して準備を進めました。資金的にも余裕がなく、大島さんには悪かったのですが、旅費を仙台と片道ずつ持ち、宿泊には温泉を準備し、苦手な人集めは皆さんに協力いただき、23日午前10時から郡山駅前

ビックアイ、市民プラザでの開催にこぎつけました。

開催にあたっては、今まで「非暴力平和隊」について聞いていただいていた様々な団体・・・日赤福島県支部・JICA 二本松訓練所・アウシュヴィッツ平和博物館・非暴力タンポポの会・ぴーすくらぶ・ふくしま平和パレード・・・と新聞社・テレビ・ラジオなどに共催・後援に加わって戴きました。

### ★ 仙台の報告会

私は仙台市の報告会に11時の準備の段階から参加させていただきましたが、仙台の報告会は急遽作ったプロジェクトチームでしたが、皆頑張って20人の参加者がありました。非暴力平和隊フィールドワーカー大島みどりさんの報告会は3時間、ティータイムを含めなごやかに開催されました。私には講演会の内容も2回目なのでごく良く分かりました。

仙台のプロジェクトチームの実行委員会の皆さんは今回限りだそうです。タイムスケジュールを作り、万全の準備には感心いたしました。終了後のミーティングには今回初めて青森から参加した方もいて、大島さんを囲み、おもにスリランカの話に花が咲きました。

### ★ 郡山の報告会

今回は、私たち福島非暴力平和隊ネットにとって初めての行事でした。会場が、15分前にしか開かないので準備にアタフタいたしました。事前には二つの地方紙が写真入で予告記事を書いてくれたことや皆さんの努力で参加者も31人でした。一昨年以來私どもが主催した会合としては最も多い参加者数でしたし、NHKが当



日夕方のテレビとラジオのローカルニュースで報道してくれましたので、かなりの方に知っていただけたのではないかと考えています。

当日、参加者から資料代という名義で 500 円戴きましたが、費用をまかないきれず事前の打ち合わせにより 7 名で若干ずつ分担しました。

また、非暴力平和隊の宣伝と資金活動を兼ねて、有志がお金を出し合って缶バッジを作成し、会場で販売してみました。200 個のうち売れたのが 20 個でしたので、まだ資金的には持ち出しですが、今後いろいろな機会に販売してみたいと思っています。

講演時間は 2 時間と仙台より 1 時間少なかったのですが、大島さんがお話を要領良くまとめてくれ 30 分以上を質疑に取れたことは、さすがだと思いました。

スリランカは 74%以上がシンハラ人、18%位が北部、東部に多く住んでいるタミール人そしてムーア人（イスラム徒）7・5%の構成です。公用語（仏教徒）はシンハラ語とタミール語です。紛争は政府とタミール人の代表を謳い、北部と東部を彼らの領土だと主張する反政府勢力タミール・イーラム解放の虎（LTTE）の間で、20 年にわたる内戦が繰り返されています。そこには少年少女兵を誘拐などで捕るという問題があります。

## ★ 非暴力平和隊とは

非暴力平和隊（NP）はマハトマ・ガンジーの「シャンティ・セーナ（平和部隊）」構想を基礎に、会社・コミュニティにおいて武力に変わり非武装の市民の力で、あらゆる暴力から自らの身を守ろうということから始まりました。2002 年 12 月インドでの設立総会が

始まりです。

理念は、「非暴力による手法を訓練し身につけた国際的な市民の団を世界各地に送り、暴力によって起こる死や破壊を防ぎ人権を保護すること」で、現地の活動家・団体に非暴力的な手法で事態に対処し、対話と平和的解決を模索するスペースを作り出すことを目的としています。

## ★ 非暴力平和隊の仕事

大島さんはスリランカで、「選挙が問題なく行われるための監視、危険にさらされている人のための巡回パトロールやシンハラ人と反政府勢力タミール・イーラム解放の虎（LTTE）との話し合いのとき護衛の同行をしました。また、何かあったとき国際赤十字やSLMMや各種団体と連絡を取り合い、情報交換をし、第三者非暴力介入など、役割分担のもと平和のために仕事をしてきました」と具体的な例を挙げて話されました。

## ★ 感想

私はこの報告を聞き平和の基礎は人対人なので、人々が十分にコミュニケーションをとることが大切だと思いました。武力を使わないこと、武器をつくらないことがいかに大切かを知りました。

今日本は、国民保護法が 05 年 3 月国会で閣議決定され、各自治体で国民保護計画が策定されつつあります。国民保護法というと国民を守る法律と誤解する人が多いのですが、この法律は「戦争やテロを想定しての備え」です。逆にこの備えをすることが国民を危険にさらすことにもなりかねません。丸腰を襲う人はいないわけで非暴力がいかに大切かを再認識しました。非暴力平和隊の活動を広めま

しょう。

報告会后大島さんをさくらの名所 2 箇所に

案内し、久々の日本の春を味わっていただき  
ました。大島さんお疲れ様でした。

## 「命どう宝」考

城間 悠子 N P J 理事

「命（ぬち）どう宝」。

きっとこの言葉を沖縄人でなくても耳にしたことがあるのではないだろうか。全国的にも知られつつある沖縄ことばの一つだと思う。

命こそ宝、命が何よりも大事、命あってこそ、というような意味になる。

一般に琉歌からきているといわれる。

「戦さ世んしまち  
みるく世ややがて  
嘆くなよ臣下 命どう宝」

(戦争の時代は終わった

平和な時代はもうすぐそこだ

嘆くでない おまえたち 命こそ宝) という感じに訳せる。

祖父母との会話の中で自然に出てくるからか、  
何か特別なことばという感覚はあまりない。

そして、現在の沖縄の平和運動を基礎づけている考え方でもある。沖縄では反戦運動のキャッチコピーになっていると言ってもいい。集会やデモでは必ずと言っていいほどそれを掲げたプラカードやビラを持った人を見かけることができるはずだ。

沖縄人の多くはおそらくこのことばが好きだし、大切だと思っていると思う。頭から批判する人はなかなかいない。日本人もよく引用したがるようだ。こういう時代だからこそ、より価値が上がっているようにもうつる。

私自身はもちろんこの言葉のメッセージを大切に受け止めたいと心の底から思う。

ただ、長い間使い続けてきただけになんてずっしりと重く、なんていろいろな人の思いを含んだ言葉だろうかと感じるのだ。

少々タブー感のあるテーマだが、誤解を恐れずに書けば、「命どう宝」思想に満足してはいけなさと考えている。

沖縄の人間が「命どう宝」と主張する。日本人がそうだそうだと続いたとしよう。一見レンタイしているように見えるかもしれないが、私は少し警戒してしまう。

沖縄人と日本人に命の優劣はないと信じたい。しかしながら、同じ言葉でも立場が違うゆえに、暴力性を露呈しているといえまいか。命が大切とって無視され続ける人々と、良心の慰めになる人がいないかと言ったらいいすぎだろうか。ことばに甘えられる人が存在しないだろうか。

現状として、もし沖縄に住む人が軍事基地の被害で命を失ったとしても、それは想定内の死であり、安全保障のためには仕方がなかったと言われかねない。

誰にとっても宝であるはずの命の価値を平等化してほしい。そうしたら今よりもななくになれるとアドバイスしたいくらいだ。

米軍と日本軍の一体化で、結局のところ、また沖縄に基地を押し付けるなら、まだバカにされるなら、新しいことばをつくる必要があるかもしれない。命こそ宝をベースに発展させていかなければ 私たちの世代は、少なくとも私は責任を負っていると思う。

#### 語句解説

「琉歌」： 短詩型 8・8・8・6 音からなる沖縄独自の文学。ウチナーグチで詠まれる。

---

## ブラッドフォード大学 体験記 Final(?)

中原 隆伸 NPJ 会員

皆様こんにちは、中原です。ブラッドフォードに着いてから早いもので 9 ヶ月ほどが経ち、授業の方も 5 月 18 日を持って全日程

が終了し、はや卒業論文を残すだけになりました。9 月末からの間でエッセイ 10 本も書いたんだー！と思うと、なんだかそれだけで

感無量で、達成感を覚えます。6月5日から8月3日あたりまでイスラエル・パレスチナに卒論の関連で行って来ますので、ブラッドフォードとももうすぐお別れということになります。

毎回ネタにせざるを得ないほど個性的な(?)ブラッドフォードの季節ですが、今回は今までと違い、自分にとっては文句無しに素晴らしい天気になっています。多分、一般の方の感覚だと「なんで5月終わりなのに、こんなに寒いんだよ!」と文句の一つも出るのでしょうが、春先に生まれた自分にとっては(?)肌寒いぐらいの方が日本の梅雨や蒸し暑い天候に比べたら、よっぽどマシです。相変わらず雨が多いのと、今日など夜の9時半ぐらいまで昼間並みに明るかった事はどうか一と思えますが…。(そして5月末にして、朝の4時には既に明るくなりかけている…。嗚呼、夏は一体、どうなるんでしょう?)

さて、卒業記念パーティー(?)があり、そこでの写真を今回送ります。今までまともな写真が送れなかったのが嬉しい限りです。パーティー以外の写真にもあるように日本人がこの大学のこの学部には本当に多いです。きれいな女の人およそ10人と一緒に撮った写真(この写真は、是非カラーで見てほしい!!…無理ですけど)は、完全に表情が崩れていますが、ま、たまにはこんな事があっても文句言われないうえですね!? 人生に一度かもしれないし。

さて、真面目モードに戻って(?),ブラッドフォードでの授業で感じた事などをま

とめて見たいと思います。授業全般を通して色々な刺激を受けましたが、その中の一つに授業でのディスカッションがあります。自分は結局前半6つ、後半8つの授業に出席したのですがその中でも特にディスカッションが面白かったのは「東アジア(及び東南アジア)の安全保障」という授業で、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、オーストラリア、フィリピン、そして日本などからの学生、イギリス人及びイラン人(?)の講師といったバックグラウンドの違う間同士での意見が絡み合い、「しっかり議論をする事(アカデミックなものかとはともかく)」の面白さを感じる授業になりました。

他に大変印象に残ったのは、イラクから来ていた学生が中東地域の授業で「正義なき平和は絶対に長続きしない」という話をされていたことです。家族を殺した犯罪者が今まで通り町を歩き、自分の隣で生活する状況で「平和」などととても考える気にならないという意見で、今まで「平和」と「正義」だと、平和が先に来ないと正義は実現できない、と考えていた自分にとって大変考えさせられるものでした。

前回に書いた平和構築関連の授業でのグループワークについて、少し書かせて頂こうと思います。グループごとの評価は特に聞いていないので客観的な評価は出来ませんが、はっきり言ってグループとしてはバラバラな感じで終わってしまいました。自分のグループには授業で積極的に発言するメンバーが何人かいて、まさに「船頭多くして…」状態になっていたのだと思います。また、特に自分に関して言えば、自分以外のメンバー

のうち、5人はネイティブ、もう一人はドイツ人と周りはみんな自分よりも英語が上手い状況のため、つい「貢献しないと」という焦りが出て自分の意見を強硬に主張してしまった所があったのかな、と反省しています。個人プレーに優れている人間が必ずしも組織の一員として機能するかは限らない、ということをもつて体験し、いい勉強になりました。

授業以外でも色々な形で勉強する機会があり、以前NPのメーリングリストで書いたPBI（Peace Brigades International：国際平和旅団）での体験はその一例ですが、ひょっとしてここでの生活を通じて一番自分に影響を与えたのは同じ寮で暮らす、平和学以外の科目を専攻する友達との会話だったのかもしれませんが。特に、パキスタンから来たイスラム教徒の友達とムハンマドの風刺画問題の話をしたり、「Honour Killing／『名誉殺人』」の話をしたのがとても印象に残っています。「Honour Killing」を正当化するつもりはまったくありませんが、例えば村人から完全に無視され、「死んだ方がマシだ」としか思えない状態になるからこういう風習があるんだ、という意見を聞いて、内容もわからずに「なんでそんな『野蛮』な風習があるんだ」といった形で非難していた事を反省しました。

その他にもインド人やパキスタン人、イラン人の友達も交えて核兵器保有についての話をしたり、インド人の環境問題（特に水資源をめぐる紛争について）が専攻の人と「持続可能な開発」について話したりと、寮のキ

ッチンでの会話は自分と違う意見、専門性、文化及びバックグラウンドを持つ人と「対話」を試みる上での本当に有意義な、考えさせられる実体験になりました。

5月末に、最後の最後のイベントとして、Day School という行事がありました。修士課程の院生が自発的に企画するイベントで、今年は講師を4人ほど招いて講演会の後に全体討議、という形式のものになりました。テーマが「マスメディアと紛争」というもので、講師の一人はAnnabel McGoldrickさんという、トランセンド平和大学というオンライン形式で授業を受けられる大学があるのですが、そこで自分が受講した「ピース・ジャーナリズム」という授業を担当されていた方だったのでとても楽しみにしていました。講演の内容はその授業の要約という感じだったので自分にはいい復習、という感じのものでしたが、そのあとの質疑応答の時間でおっしゃった「もっと『平和』とか、『平和活動』という概念を、人をひきつけるポジティブなものに変えていく事が必要だ」とおっしゃっていたのを聞いて、個人的にとっても共感しました。

大変率直に自分の気持ちを述べさせて頂くと、NPJの中にいる自分も、「平和活動」というと「まじめ」「堅苦しい」という印象を未だに受けます。「ピース・ジャーナリズム」の中に「When it bleeds, it leads（流血は人を引き付ける）」といった言葉が引用されており、ニュース番組の中で戦争や人が争っている場面がニュース価値の高い画面として使われている事実が指摘されています。こういったショッキングな報道に視聴者が

引き付けられる「暴力の文化」をいかに変えていくか、そしていかに平和というコンセプトを「楽しく、明るく、人を引き付けるもの」に出来るか、ということが平和を考える上でとても大切だ、と自分は考えています。

一年間早かったようで、でも色々なことを考えさせられ、様々な体験を出来た一年だった、と今では大変満足しています。1年後、5年後、あるいは10年後どこで何をしているにせよ、ブラッドフォードでの一年間は、当初の目的であった「国連に就職するためのパスポートとして、修士号を取る」のみでなく、自分の人生に様々な価値を与えてくれるものになる、と今では確信しています。

自分は「人脈」という言葉には、あくまで個人的にですが余りいいイメージを抱いていません。「自分の利益目的のため?」、「その人と仲良くなれば将来役に立つから??」友達を作るものではなく、友達は友達であるから大切である訳で、それ以外何物でもないと思いますが、ブラッドフォードでの生活を通じて、本当に色々な人に知り合い、刺激を受け、苦しんでいる時励ましてもらい、悩んでいる時悩みを聞いて相談に乗ってもらい、困っている時助けてもらいました。

その人たち、僕の大切なブラッドフォードでの友達に感謝し、最後に生活費の面で結局頼りきってしまった両親に心の底からの感謝の意を表して、筆を置きたいと思います。

みんな、本当にありがとう！

(中原隆伸 ブラッドフォード大学修士課程  
平和学専攻)

## \*編集部注

ウェブサイトに掲載されるニュースレターは写真はカラーです。是非ご覧ください。



卒業記念Ball Partyにて、同期生たちと。着ている服がみんなとてもカラフルなので、白黒になるのがもったいない?



同じくBall Partyにて、同期のAchim (ドイツ人)と。多分、一番ウマがあった学生かもしれません。



同期生の誕生パーティーで。自分の目立ちたがり屋な性格がにじみ出てます…(写真左下、一人だけ文字通り「でかいツラ」してるのが自分です)

## 非暴力平和隊・コリア ( Nonviolent Peaceforce Corea ) との交流ミーティング

11月に開催 奥本 京子 NPJ理事

ニューズレター第13号にも報告されているように、今年3月7日、君島東彦共同代表、小林善樹理事、私の3人で、非暴力平和隊・コリア（ここではNPCと略します）のオフィスを訪ねました。その後の交流について、少し現状を報告致します。

3月には、親交を深め、互いに協力をしていくようにという気持ちで表敬訪問をしたわけですが、そこではまず、お互いのメンバーの紹介、活動背景、また、NPJとNPCのそれぞれの活動の紹介と理解、そして今後の協力の可能性について話をしました。具体的には、①NPCとNPJとがジョイント・プロジェクトを組んで、さらなる交流を促進する、②非暴力の概念と実践のトレーニング・プログラムを（例えば1週間の集中型で）行う、③NPCとNPJが「友人」となるための交流会を重ねながら、必要であれば東アジア・太平洋のメンバー・オーガナイゼーションにも同席してもらおうべく声をかけ、NP・（東）アジアで話し合ったことの中から国際NPへ提案などをする——などという事が話されました。

5月の24日から27日にかけて、別件（トランセンドの活動）のため私がソウルを訪ねた機会に、NPCの代表（Park Joon S.さん）と事務局長（Lee Mihwaさん）と話をすることができました（たまたまトランセンドの

ディレクターであるガルトゥング博士の講演とワークショップに参加されていたので、オフィスを訪れることをせずともお目にかかることができましたのです）。NPJ側からのリクエストは、年内に一度、ソウルで、NPCとNPJが交流会を持ち、うまく運べば、東アジア・太平洋のメンバー・オーガナイゼーションにも同席してもらおうという内容でした。

しかしNPC側としては、今回はまず、NPCとNPJの交流会に集中したいとのことでした。さらに、できれば、そういった友情を育むための会合を、2～3回は（場所を交代しながら）もちたいということのようです。第1回目は、NPJからソウルのNPCを訪ねて、今後如何に交流を進めていくか、また、日韓の協力をどのようにして東アジア全域の協力に繋げ、さらにNP世界総会に向けての提言をまとめていくか、などを模索するきっかけになればと思っています。

帰国後のNPCとの連絡を経て、初の会合は、年内11月25日（土）にソウルで開催されることになりました。この韓日交流ミーティングに、NPJからできるだけ多くの方に参加していただきたいと思います。日本からの訪問団の宿泊場所などを含めて、交流会議のご案内を、別途NPJ事務局からお送りするはずですが、奮ってご参加くださいますようお願いいたします。

## ■ 希望のための非暴力セミナー

2004年から私たちは非暴力について考える連続講座を開いてきました。非暴力という言葉は多少聞いたり、使われるようになってきても、その本質はまだまだよく理解されていないと感じています。

私たちは非暴力という考え方、生き方、そして行動の仕方が、これからの地球の未来を切り拓く重要なカギになるのではないかと考えています。

人を押しのけたり、抑圧したり、差別したり、威嚇したり、殺しあったりする社会に希望はありません。またそれらに無関心でいることで、そうした行為に結果的に自分が、人びとが加担してしまっている社会にもやはり希望はありません。

それに対し私たちが考える「非暴力」は、人と人が支えあい、つながりあいながら積極的に希望を生み出すものです。自分を変え、そして社会を変える希望の思想としての非暴力の可能性を探っていきたいと思います。

「非暴力連続講座」から新たに名前を変えてスタートする「希望のための非暴力セミナー」を通して、社会を変えていくちからとなる、非暴力の輪を広げていきたいと思っています。あなたの参加をお待ちしています。

### 第2回 希望のための非暴力セミナー

#### 「非暴力をつちかってきた沖縄の平和運動」(仮題)

- 講 師： 安良城 米子さん（沖縄国際大学非常勤講師）  
参考文献：『オキナワを平和学する！』法律文化社（共著）
- 日 時： 7月22日（土）午後2時～4時半
- 会 場： 文京シビックセンター・4階和室1  
東京都文京区春日1-16-21  
Tel：03-5803-1105
- 交 通： 東京メトロ地下鉄丸の内線・南北線「後樂園駅」徒歩1分  
都営地下鉄三田線・大江戸線「春日駅」徒歩1分
- 参加費： 800円

### ■月例会（日時はお問合せください。またはウェブサイトをご覧ください）

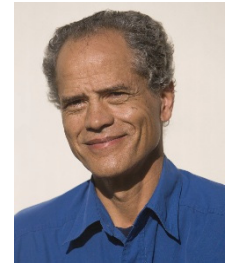
場 所： NPJ事務所（三田線白山駅下車、A1出口より徒歩2分、モスバーガーと  
同じビルの3階。わからない方は駅からお電話ください）

参加費： 飲食実費（1000円程度、飲み者・食べ物持ち込み歓迎）



## ■ 暴力のない社会をめざして：非暴力ワークショップ

ファシリテーター：デイヴィッド・グラントさん David Grant



訓練を受けた国際市民を紛争地に派遣し、非暴力的解決の促進を目的とした非暴力平和隊（NP）でプロジェクト開発、国連・各地の国際理事との連絡調整担当。それまではオランダにおいて6年間、国際友和会での非暴力の教育ならびにトレーニングプログラムのコーディネーター、オランダ中東監視団のトレーニング、NGO (<http://www.kit.nl/>) で異文化交流の専門家として従事。

90年代には米国の平和・環境・保健促進の団体 (<http://www.listeningproject.info/>) で国際理解促進の活動に従事。またベトナム戦争への良心的兵役拒否、市民テレビ放送ディレクター、自給農、ホームレス支援、創造的表現指導を行なう。各地域の文化に根づいた非暴力闘争に関心をもつ。

◆日 時： 7月28日（金）14：00～19：00

29日（土）10：00～18：00

【基本的に2日間全日程参加、初日のみ参加も可ですが全日程参加者優先】

◆定 員：20人【要申込み、通訳あり】

◆会 場：大阪女学院大学（部屋は参加者にお知らせします）

地下鉄長堀鶴見緑地線 玉造駅下車、1号出口より徒歩3分

JR大阪環状線 玉造駅下車、徒歩7分

◆地 図：<http://www.wilmina.ac.jp/access/>

（参加者には地図を郵送します。）

◆参加費：5000円（2日間。NPJ会員・学生4000円。NPJへ当日入会可）

（1日目のみ=3000円、NPJ会員・学生2000円）

◆主 催：非暴力平和隊・日本（NPJ）

東京都文京区白山1-31-9 小林ビル3階

TEL 080-5520-3077

メール：[ohata-yu@jca.apc.org](mailto:ohata-yu@jca.apc.org)

## 会 員 募 集

■ 非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」をご利用下さいますようお願いいたします。

### ◎ 正会員（議決権あり）

- ・ 一般個人：1万円
- ・ 学生個人：3千円
- \* 団体は正会員にはなれません。

### ◎ 賛助会員（議決権なし）

- ・ 一般個人：5千円（1口）
- ・ 学生個人：2千円（1口）
- ・ 団体：1万円（1口）

■ 郵便振替：00110 - 0 - 462182 加入者名：NPJ

\* 通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。例：賛助個人1口

■ 銀行振込：三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義：NPJ 代表 大畑豊

\* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ ウェブサイトからのお申し込み：<http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/nyukai.html>

☞ 案内：『平和・人権・NGO すべての人が安心して生きるために』君島共同代表が『平和・人権・NGO すべての人が安心して生きるために』（新評論）に、「平和をつくる主体としてのNGO」という章（約30ページ）を書いており、この中で非暴力平和隊のことを詳しく紹介しています。出版社のご厚意により、この1章の抜き刷りを作成し、配布させていただけることになりました。是非、非暴力平和隊の紹介にご活用ください。A5版・表紙カラー・一部300円（送料別）、ご注文は事務局まで。

## ▲◆◎⊕⊖⊗⊘ 事務局便り ⊘⊗⊕◆▲

今号から1年間会報の編集を担当することになりました。さっそく1号目から発行が遅れてしまいました。次号から遅れないよう努めたいと思います。記事の投稿や情報・話題の提供を、心より歓迎いたします。また、原稿の依頼がいくこともあると思いますが、そのときはどうぞ積極的にお引き受けください。よろしく願いいたします。（中里見 博）

## 非暴力平和隊(NP, Nonviolent Peaceforce)とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際NGOで、非暴力平和隊・日本(NPJ)はその日本グループです。

これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために2002年に創設されました。非暴力・非武装による紛争解決が「理想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

NPは、地元の非暴力運動体・平和組織と協力し、紛争地に国際的なチームを派遣、護衛的同行や国際的プレゼンス等によって、地元活動家等に対する脅迫、妨害等を軽減させ、地域紛争が非暴力的に地元の人によって解決できるよう、環境づくりをすることを目的としています。

NPは2003年9月からスリランカでの活動を開始し、現在16カ国から25人のメンバーを派遣し活動しています。

